
宮園ユキコー南国の魔法番外編一

ありま氷炎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

宮園ユキコー南国の魔法番外編Ⅰ

【Nコード】

N8800P

【作者名】

ありま氷炎

【あらすじ】

「南国の魔法」の影のヒーロー、武田タカオの婚約者の宮園ユキコの苦悩を書いています。

本編を読まなくても大丈夫だと思いますが、読んでいたほうが彼女のつらさがよくわかります。

ユキコがタカオに会ったときから物語は始まります。

全7話です。*ブログで完結後、なろうへ掲載してます。

宮園ユキコ 1

桜が雪のように舞っていた。

雨ばかり続いていて桜の花びらが優雅に舞う姿が数日見れず、このまま花見をせず桜が散ってしまうのかと思っていたけどとうとう見えて私はほっとした。

桜の花びらが舞う中、わたしは一人の男の人をみた。

茶色のふわふわとした髪をなびかせ、その人は桜の花を眩しそうに見ていた。

あれは確か武田くんだ。

こんなところで何してるんだろう？

それにしても男の人なのにやっぱりきれいな顔……
入社した時からそう思ってたけど。

「ユキコ？」

側にいたマイが不思議そうに私を呼んだ。

「早くしないと間に合わないわよ」

マイは私の腕を取ると駅に急いだ。

あれ？

再度桜並木を見たら、武田くんの姿は消えていた。

「宮園さん？」

ふとぼんやりをパソコンを見てるとそんな声がした。ふと見ると側に武田くんがいた。私は顔が赤くなるのがわかった。本当すごくきれいな顔してる。

武田くんは見られてるのになれてるらしく、私の視線に微笑み返した。

「これ、宮園課長に頼まれたもの。今日は一人で帰るようになって言っただよ」

父さんったらこんな伝言まで武田くんに頼まなくても！

私は顔がさらに赤くなるのがわかった。

「気をつけて帰ってね。」

武田くんは微笑みを浮かべたまま、私の肩を軽く叩くと部屋を出て行った。

武田タカオくんか…

私は武田くんの後姿が見えなくなるまで見つめていた。

「た、武田くん！？」

玄関のベルが鳴って急いで見に行くと、顔を真っ赤にした父さんに肩を貸した武田くんが立っていた。

「すまんなあ。武田くん。」

父さんは上機嫌でそう言うのと武田くんの肩をたたいて、千鳥足で家に上がった。

「まあ、あなた！」

キッチンから出てきたお母さんがお父さんに声をかけるのがわかった。

「ありがとう。送ってくれて」

私がそう言うのと武田くんは微笑んだ。

「相当飲んだから、後で水をあげたほうがいいよ。それじゃあ」

武田くんはそれだけ言うのと私に背を向けた。

「あ、武田くん！」

気がつくとは私はそう呼びかけていた。

「何？」

武田くんは振り向いてそう答えた。そのきれいな顔に見つめられて私は胸がどきどきするのがわかった。

「あの、昨日、駅前の桜並木にいたでしょ」

馬鹿なことを聞いた。

自分でもなぜそんなことを聞いたのはわからなかった。

「ああ、見てた？」

武田くんはあきれられる様子もなく笑った。その笑顔がいつもと違うように見えた。

「きれいな桜だったから見とれてしまったんだ。」

武田くんはその目を細くしてそう言った。その顔がとてもせつなく私はうかつにも見とれてしまった。

武田くんはそんな私を見つめた。

「今度一緒に桜見に行く？」

私は武田くんの言葉が信じられなかった。でも体は頭よりも早く動いていた。

「うん」

気がつくと私はそう答えていた。

宮園ユキコ2

桜の木の下で数人の若者が賑やかにお酒を飲んだり、つまみを食べたりしていた。

「宮園さん」

私の姿を見た武田くんは穏やかな笑みを浮かべた。

「えっと、こっちが私の友達で川辺マイ」

私は後ろにいたマイを武田くんに紹介した。

「川辺さんね。よろしく」

武田くんはそう言ってマイに手を差し出した。

「マイって呼んでください」

マイは顔を真っ赤にしながら武田くんの手を両手で握りしめた。

マイったら

私は苦笑しながら武田くんを見た。武田くんは困った様子を見せることもなく微笑んだ。

「じゃあ、マイちゃん。よろしくね。僕の友達を紹介するよ」

武田くんはさりげなくマイの肩にさわり、桜の下で集まっている若者達を指差した。

「おい、武田。いつもみたいに女の子を一人占めするのはやめろよな」

「一人占めって、ここにも私のような美人がいるでしょ」

武田くんの友達がマイをみるとワイワイと話し始めた。マイはそういう集まりに慣れてるらしく、すぐに輪に溶け込んだ。

「宮園さん、もしかしてこういう集まりって嫌いだった？桜を見にいくって言ったら、友達も行きたいっていっちゃって。合コンみたいだけど違うからね」

武田くんは苦笑しながら私の肩を優しく触れた。

「まあ、いい奴ばかりだから。気楽にね」

武田くんの友達はおとなしい感じの人から派手な感じの人まで様々だった。小学校からのエスカレーター式の学校に通っていた私にとって珍しい人ばかりだった。

マイもそう思ったらしく、いつもより弾けていたように見えた。

武田くんの友達の一人できれいな女性がいた。その人は武田くんの彼女らしく、ずっと側にいてその瞳を武田くんに向けていた。そして時折マイや私に冷たい視線を向けた。

心配なんだろうなあ。

武田くんのような彼氏を持つとなんだかいつもハラハラしそうだ。私はそういうハラハラする恋愛は好きじゃない。

武田くんは素敵ですつと見つめていたけれど、付き合うならもっと普通の人がいいなあ。

「宮園さんって下の名前なんていうの？」

武田くんの友達の一人、確か池田ナツキくんだったけ？話しかけてきた。

「えつと、ユキコだけど」

「ユキコかあ。かわいいな。ユキコって呼んでもいい？？俺のことはナツキって呼んでよ」

池田くん ナツキくんはそう言って笑った。子供みtainな無邪気な笑顔が印象的だった。太陽みたいな元気な人だ。私はつられて微笑んだ。

「うん。いいよ。ナツキくん」

武田くんのおかげで私はナツキくん付き合い始めた。

それを知った武田くんは合コンじゃなかったんだけどと苦笑してた。マイは武田くんを気にいつてしまったらしく、ナツキくん達が集まることを知るとついてきた。私は何度もあきらめたほうがいいと言ってもマイは諦める様子を見せなかった。

「ユキコ。ごめん。もうマイちゃんと呼ばないでくれない？」

ある日、ナツキくんは申し訳なさそうに言った。

「武田は誰にでも優しいから、すぐに女の子をその気にさせるんだ。俺はあいつのそういうことが嫌いんだけど、付き合ってるトモミが可哀想になる」

ナツキくんはそう続けた。

「あ、でも勘違いしないでくれよな。トモミとは俺はなんでもない。ただ大学のことから知ってる仲間だからさ。武田はやめた方がいいって言ったんだけど」

ナツキくんは苦笑した。

「うん、わかったわ。呼ばないっていうのは難しいけど、言わないようにする」

私がそう言つとナツキくんは思いついたような顔をした。

「そうだ、この機会にみんなで会うのはやめようぜ。俺もユキコが武田と会つとときどきするし。」

「え？」

「だって、あいつかつこいいじゃん。俺はあいつと比べると全然だから」

そんなことない！

私は思わずナツキくんを抱きしめた。

「ナツキくんはナツキくんのいいところがあるんだから。私はナツキくんが好きなの」

私がそう言つとナツキくんは嬉しそうに笑って私の背中に手を回した。

「嬉しい。本当に心配だったんだ。ユキコは会社もあいつと一緒に
から」

ナツキくんの言葉を聞きながら、私はふいに不思議な感覚が覚えた。
その感覚は時間とともに形になるようになっていった。

宮園ユキコ3

「お前って最低！」

ナツキくんはそう言っただけで武田くんを殴った。武田くんの体が床に叩きつけられる。武田くんは口の中を切ったようで唇から血が出ていた。

「トモミの気持ちを踏みにじりやがって」

ナツキくんは乱暴に私の腕をつかむと武田くんを背中に向けて歩き出した。武田くんは床に座ったままだった。

武田くんはトモミさんと付き合ってたまま、マイとも付き合い始めたようだった。私はトモミさんと別れたものだと思っていたのだけど、ナツキくんに聞くとそうではなかった。

ナツキくんは怖い顔で歩いていた。

その顔を見上げながら私は武田くんのことを気になっていた。

翌日武田くんにしてはめずらしく会社を休んだ。病欠ということになっていたが、理由は多分ナツキくんを殴られたせいだと思った。

私はふと気になって、もう桜ではなく新緑の葉をつけている駅前の桜並木に会社帰りによった。武田くんはそこにいた。ベンチに座ってぼんやりと空をみていた。顔が腫れていた。

「武田くん」

私がそう呼びかけると武田くんは驚いたような顔を見せた。

「宮園さん、こんなところだとナツキに怒られるよ」

武田くんは私から視線をそらすとそう言って笑った。その笑顔は力

なかった。切ない笑顔だった。あの桜を見ていた時の表情と一緒にだった。

「ま、マイを、傷つけないで」

ふと出た言葉がそれだった。武田くんは穏やかな笑顔を私に向けた。「大丈夫。僕はもうマイちゃんともトモミとも会うつもりはないから」

武田くんはそう言う私に背を向けて歩き出した。

私はその背中がとても孤独で抱きしめたくなった。

合鍵を使ってドアを開けると男女のあえぎ声が聞こえた。確かめたくなかったけど、部屋に入った。

ナツキくんと思われる男の人の下に、トモミさんがいた。

トモミさんは私の顔を見ると目を開いた。そして悲しそうな顔になって体を起こした。

ナツキくんが振り向いて私を見る。

私は部屋を逃げ出した。

予感はしていた。

でもこんな形で知りたくなかった。

トモミさんから、ナツキくんから電話があっただけで出なかった。出たくなかった。

「宮園さん？」

駅前の桜並木のベンチで座っていると声をかけられた。声の主は武田くんだった。気がついたらここに来ていた。

「武田くん」

私は武田くんの胸に飛び込んでいた。武田くんはそっと私を抱きしめた。

それから武田くんも私も付き合うわけでもなく、ただ普通の同僚として過ごしていた。武田くんと付き合っ、トモミさんやマイのよ
うに傷つきたくなかった。

私は普通の恋愛をして結婚をしたかった。

1年がたち、武田くんは主任になり、父は部長になった。

武田くんはよく家に来るようになったけど、私はあえて近づかないようにしていた。

武田くんは魅力的だった。

近づけばその魅力から逃れられないのがわかっていた。

宮園ユキコ4

「宮園さん、これあなた宛ね。あと悪いけどこっちの封筒を武田主任に届けてくれないかしら」

総務部の山田力ヨさんがそう言って私に白い封筒を渡した。

同じもの？

武田くんと私宛？

誰からかな？

「武田くん」

パソコンに向かっている武田くんに私は声をかけた。

彼は私を見ると、穏やかな笑みを浮かべた。

やっぱり危険だわ。

私は武田くんと視線を合わさないように近づいた。

「これ、山田さんに頼まれたもの。」

私はそれだけ言っと白い封筒を武田くんに渡した。

「ありがとう」

武田くんは受け取ると何を思ったのか私の目の前で封筒を開け始めた。私は自分のものをまだ開けていなかったので思わず足を止め、武田くんの手元を見つめた。

それは結婚招待状だった。

「ナツキとトモミからだ」

武田くんはぼつりとつぶやいた。

息が止まるかと思った。

ナツキさんと最後に会ったのは、見たのは1年半前のあの日だった。

私は武田くんに構わず、走り出していた。

苦い気持ちちがよみがえる。

そして改めて自覚する。

ナツキくんのことを好きだったんだったということを。

「おひさ〜」

マイは赤ちゃんを抱っこしながら私を出迎えた。

「あら。元気なそうな顔ね。まあ、入ってよ」

マイはにこやかに笑いながら私を部屋に招きいれた。

マイは半年前に結婚した。

デキ婚っていうやつだ。

武田くんと別れた後、付き合った彼が今の旦那さんだった。

デキ婚で心配してたけど、マイは幸せそうな顔をしていた。腕の中の赤子も嬉しそうに笑っている。

「本当久しぶりね。元気だった？」

そう言ってマイは赤ちゃんをベビーベッドに寝かせた。そして天井につるしてる玩具の電源をつけた。

「さて、どんな困った用件なの？」

マイはベビーベッドから私に目を向けた。

マイは私と違って人に頼らないタイプだった。いつも一人で決めていた。かといって冷たいわけではなく、私の相談によく乗ってくれた。

「え！まじで？」

ナツキさんとトモミさんからの結婚招待状の話したらマイは驚いた声を上げた。

「二人があの後付き合っていたのは知っていたけど、結婚とは..。しかも元カノに招待状送ってくるって信じられないわ！」

マイは腕組みをしてそう言った。マイの声にびっくりして赤ちゃんが泣き出す。

「あーごめんね。ごめん」

マイは慌ててベビーベッドから赤ちゃんを抱きかかえた。

「もちろん、行かないんでしょ？」

マイの言葉に私は返答できなかった。

行きたくなかった。

でもこの気持ちを終わらせたかった。

終わらせて次へ進めたかった。

「武田くんにも来てたけど、彼は行くのかな？」

私は思わずそう口に出していた。

「タカオ？彼にも出してるの？本当おかしな人達ね。」

マイはあきれた声を出した。

「私にまで届いていたらどうしようかしら」

マイは苦笑してそう続けた。

「大丈夫だと思うわ。会社宛に来てたから。住所知らないみたいだし」

「ユキコ、冗談よ。さすがに私に送ってくるはずないわ。だってトモミさんはタカオのこと忘れられないでしょ」

私はマイの言葉にびっくりしてマイの顔を見つめた。

「タカオにはまると痛い目を見るわ。私もそうだったし。結婚式、

無事に終わるといいけどね。」

マイは意味深な笑みを浮かべた。

「悪いこと言わないわ。行かないほうがいいわよ。多分すごいことになると思うから。あと、タカオには近づかないほうがいいと思う。きつと傷つくだけだから」

マイはそう言うと言ちやんを抱いて、台所に向かった。

マイも多分忘れてない..

結婚しても思うは残るのかな。

マイの背中をみて私はそう感じた。

結婚招待状は結局、欠席に印をつけて投函した。

そのナツキくん達の結婚式の日、私は家にいたくなくて、外にでた。

なぜか、あの桜並木の道に来ていた。

秋が終わりを迎えようとしていた。

緑が寒そうにしていた。

私はベンチに座って空を見上げた。

空は限りなく青かった。

私の心もこんなに澄み切っていたらいいのに。

「宮園さん？」

武田くんの声がした。

「結婚式行かなかったんだ」

私は思わずそう聞いていた。武田くんは苦笑した。

「まあ、ね。ナツキに悪いし」

武田くんはそう言つと空を見上げた。

「いい天気だね」

私と武田くんは空を見ていた。

それぞれ抱える思ふは違ふはずだけど、
なんだか共犯者のよう
で心地よかつた。

宮園ユキコ5

「ユキコちゃん、この方はどう？」

そう言つて母は私に写真を見せた。写真の中にはさわやかそうな笑顔の男の人が写っていた。

「お母さん、私は結婚するならちゃんと付き合ってからがいいの。お見合いとか興味ないから」

25歳を過ぎてから、両親は何かと結婚の話をするようになった。父いわく結婚が女の幸せだそうだ。私は仕事には興味なかったし、早く結婚したかったけど、大好きな人と結婚をしたかった。

お見合いは嫌だった。

「宮園さん」

声をかけて振り向くとそこには武田くんときれいな女性が隣にいた。「エミ、紹介するよ。この人は宮園ユキコさん。私の上司の娘さんで、同僚なんだ」

「こんにちは。」

エミと呼ばれた女性はぺこりと頭を下げた。その顔に心配げな表情が見とれた。

やっぱり武田くんって…

デート中に同僚とは言え、女性に声をかけなくてもいいのに。

「これからどこに行くの？」

とりあえず私はそう聞いた。

「ああ。映画を見るんだ。エミが見たいっていていた映画があつて」

武田くんは穏やかな笑顔でそう答えた。エミさんの表情がさらに曇るのがわかった。

「あ、こんな時間！武田くん、エミさん、映画楽しんでね。それじゃあ」

私は慌ててそう言うと二人から離れた。

邪魔をしたくなかった。

二人の姿が見えなくなるところまで来て私は立ち止まった。そして大きく深呼吸をする。

なんだか嫌な気持ち。

デートかあ。

しばらくしてない。

結婚を前提にお付き合いかあ。
試してみようかな。

「君は料理できるの？」

さらさらした黒髪をかきあげあがら町田サトシさんはそう聞いた。

「ええ、好きですけど」

町田さんは某証券会社に勤める30歳の男性だった。ハンサムな人だった、でも潔癖な感じで、レストランに入ってもナプキンでフォークとナイフなどをふき取ってから使った。

この人だめかも…

「俺はダイビングが好きなんだ。君は興味ある？」

短い髪に健康的に焼けた男の人、田村ノボルさんはそう言った。町田さんは苦手な感じだったけど、田村さんは気さくで気が合いそうだった。

私と田村さんは付き合い始めた。

「プーケットって知ってる？」

ベッドにもぐった私に田村さんはその優しい瞳を向けて聞いてきた。私が首を横に振ると田村さんは笑って私の髪を撫でた。

「タイにある島なんだけど、ダイビングに最適なんだ。今度の休み行かない？」

私はうなずいた。

「武田くん！」

空港で武田くんの姿を見て私は思わず声を上げた。

「ああ、宮園さん。君もどこか行くの？」

ショーカットの髪が似合うかわいい女性の隣で武田くんはそう言うて笑った。

また違う女性だ…

「ユキコちゃん、この人は誰？」

私の横にいた田村さんが穏やかな声でそう聞いた。

「この人は武田タカオくん。私の同僚なの。」

「はじめまして。私は田村ノボルです。私達はプーケットにダイビングに行くんだけど、君達もどこかにいくの？」

田村さんは武田くんに笑顔を向けた。

「田村さん。はじめまして。この子は僕の彼女で野村メイ。僕たちは中国に遊びに行くんです。」

武田くんはメイと呼ばれた女性の肩を寄せてそう答えた。メイさんはちょっと赤くなって照れていた。

私はなぜかメイさんがうらやましかった。

「じゃあ、私達は飛行機の時間があるから。ユキコちゃん、行こう」
田村さんは私の肩を優しく抱き寄せるとゲートに向かって歩き始めた。

「またね。宮園さん」

武田くんは手を振るとメイさんを連れて私達とは逆の方向へ歩いていった。

なんだろう。

嫌な気持ち…

私はこの気持ちを旅行中ずっと抱えて楽しめなかった。

そして26歳になり春が来た。

私は結局田村さんと別れた。

会社帰り桜並木を見るために来ていた。

風が吹き、桜の花びらが雪のように舞っていた。

そこにあの人が立っていた。

以前そこで見たときより、骨格がすっかりして男らしくなっていた。

それでもその美しい顔には変化がなかった。

初めてここで見たときから予感はしていた。

多分彼のことを好きになってしまったらうということ。
ただ認めたくなかった。

傷つくのがわかっていたから。

でもやっぱりだめだった。

「武田くん」

私が呼ぶと武田くんは穏やかな微笑を私に向けた。

私は彼に囚われていた。

彼の魅力に勝てなかった。

宮園ユキコ 6

しばらくして私は武田くんと付き合い始めた。

武田くんは私をユキコと呼んだ。

そして私のことを一番に思ってくれた。

以前のように女性が集まる場所へ行くこともなくなった。

でも私はなにか違和感を感じていた。

彼は私だけを見てくれる。

私だけが彼を知ってる。

でもそれは違うような気がしていた。

私はその嫌な予感を無視していた。

彼の側で幸せだった。

彼の柔らか髪をなで寄り添っているのが幸せだった。

1年後、武田くんは係長になった。

彼は変わった。もっと大人になった気がした。

それでも私には変わらぬ優しさをくれた。

家族で会うことが多くなってきた。

私達は結婚を意識し始めた。

武田くんも同じ気持ちだと思っていた。

私は武田くんと結婚して、彼の子供を生み、彼の側で生きていくつもりだった。それは私の夢だった。

武田くんだわ。

私は会社の休憩所で武田くんの姿を見つけた。声をかけようとしたとき、ふと武田くんの表情がいつもと違うことに気がついた。それは桜を見上げていたときと同じ切ない表情だった。

視線の先に、美しい黒髪を束ねた女性がいた。その女性は武田くんの視線に気づいていないようだった。

確か上杉カナエさんだっけ？武田くんの高校生の同級生って言うていた…

私は気持ちが焦った。二人を話させたくなかった。嫌な予感がした。

「あ、武田くん」

私は武田くんの腕に腕を絡ませた。私の声で上杉さんは私達がそこにいることに気づいたようで、その黒い目でこちらに向けた。そして椅子から腰を上げるとその場を離れた。

武田くんの視線は上杉さんの後姿を追っていた。

嫌だった。

「今日はチケットを予約する日でしょ」

私は武田くんに悟れないように精一杯の笑顔を作った。そう言った。

あの視線…

せつない視線…

私の胸が騒いだ。

今まで彼が付き合ってきた女性を見てきたけど、彼があんな視線で見ていることはなかった。

でも私はもうだめだった。

彼がいないとだめだった。

離れたくなかった。

こんな恋したくなかった。

穏やかな優しい恋がしたかった。

でも彼に囚われた。

逃れられなかった。

宮園ユキコ7

「上杉さんってかっこいいわよね」

途中入社で私と同じ年の木下ノリちゃんがファンデーションを塗り直しながらそう言った。

上杉

聞きたくない名前。

「でも私はあーはなりたくないわ。仕事って所詮お金を稼ぐための手段なもの。やっぱり女の幸せは結婚よ！」

私はノリちゃんにそう答えた。

上杉さんの話は聞きたくなかった。

私は仕事なんかどうでもよかった。

ただ優しい家庭を作りたかった。

「でもキャリアってあこがれない??」

ノリちゃんは意外そうに笑いながらそう続けた。

「そう?」

私は話を変えたかったので興味なさげに答えた。するとノリちゃんにはやっと笑った。

「あんたは部長の娘だし、かっこいい彼氏がいるからでしょ」

「まあね。」

そう武田くんはみんなの憧れ。かっこいいし優しいし、仕事もできる。

私はそんな彼を結婚するの。

そう思うと気持ちが軽くなった。

私は彼の婚約者なの。

「それでいつ結婚するの??」

ノリちゃんはうらやましそうに私を見つめた。その顔はすでに化粧直しが済み、完璧に整っていた。

「秘密」

私はそう答えながら仕上げの口紅を塗り直した。

「え? シンガポール?」

「そう。今度の社員旅行はシンガポールになったみたいなんだ」
ベッドで横になりながら、武田くんはそう言った。

「ユキコは行けないんだっけ?」

「うん。友達の結婚式。親しくしてた子だから絶対に出たいの」
「お土産買ってくるね」

武田くんはそう言って私にそっと口づけた。

武田くんはいつも優しい。
穏やかな視線で私を見る。

あの時も彼は優しく私を見つめていた。

「僕たち、そろそろ結婚しようか」
いつもの穏やかな顔だった。

結婚..

夢に見ていた、待っていた言葉だった。
でもなんだか嬉しくなかった。

「ユキコ?」

私は涙が出てきた。
なぜだろう、

嬉しいはずなのに、その変わらない穏やかな笑顔を見て涙が出てきた。

「ごめん。嬉しくて涙が…」
私は嘘をついた。

武田くんはそつと私を抱きしめた。

彼はいつも優しい。

でもその優しさが嘘の優しさであることに私は気がついてしまった。

好きな人はほかにいるのに…

でも私は武田くんと離れる勇気がなかった。
その穏やかな優しさに包まれていたかった。

それから数週間後、私達は結婚式の日取りをきめ、武田くんとお父さん達は社員旅行に出かけた。

宮園ユキコ7（後書き）

こうして武田タカ才は運命の社員旅行に行き、「南国の魔法」が始まります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8800p/>

宮園ユキコー南国の魔法番外編一

2011年7月12日12時11分発行